

『ゆけむり史学』第四号に寄せて

田村 憲美

今年是个人的な事情もあって、ゆけむり史学会にもあまり参加できなかった。それは残念だったけれども、とくに博士後期課程の方々のなかには、報告会をへて、外部のよく知られた学会・研究会で報告をした(あるいはする予定の)人や査読つきの専門誌に論文を発表した人たちもいて、頼もしい。それらの業績を専門的に詳しく評価できる力量を欠いているとしても、私にもそれらの仕事がよく考えられ準備された、充分に意義のある作業であることは理解できる。

そのような論文の別刷りを頂戴すると、自分の経験に照らして、この著者たちの誇らしさやこれからへの不安も共有できるような気がする。同期に卒業した人びとと比べて、社会的経験や所得の面では必ずしも得になるとはいえない大学院への進学だが、その不安も誇らしさも併せて、将来懐かしく思い出される時がくることを、私もほかの教員とともに祈っている。

それに加えて、別刷りを読むと、なにか促がされるような腕がむずむずする感覚がする。

それは、自分が大学院に在学していたところに、活躍する同級生らに感じたものにもよく似ている。大学院には様々な人々がいた。一時間の演習のために、かなり長い時間にわたる入念な準備が学生同士で行われるのが慣例だった(本番の演習ゼミナールに対してサ

ブゼミなどと呼ばれた)。中学・高等学校の非常勤講師やそのほかのアルバイトなどを持つている上級生・同級生も多かったから、だいたい夕方からはじまって夜の九時過ぎくらいにはなったものだった。人交わりが苦手で、大学院に入学したら授業時間数も少ないし、自分のペースでやれるものと期待していた私は、おおいに当てが外れたし、実際に疲労のもとにもなった。

むろん滅多に口にはしなかったが、私はときおり上級生や同級生は「いったい何が嬉しくてこんなに入れ込むのか」という違和感を持つことがあった。少し時間がたつて、外部の学会活動に参加するようになる、さらに周囲は熱心な人々ばかりとなった。さまざまの議論は酒を交えて深夜にも及んだ。酒席の苦手な私には苦痛だが、取り残されてもいいという度胸はない。

とはいえ違和感はあるながらも、私はそういった人々に憧れと尊敬の念を感じたものだった。あるいは、はたから見れば私も「いったい何が嬉しくてこんなに入れ込むのか」という範疇に当てはまっていたのかもしれない。そうだったなら、嬉しいのだが。

ゆけむり史学会参加者の活動に触発されて、昔話をしてしまった。まずいが、そういう年齢なのであろう。お許しください。

さて、『ゆけむり史学』もとうとう第四号となった。

寄稿者と編集を担当された川久保さんには教員一同に代って「お疲れ様」を申し上げたい。三号雑誌に終わらなかったのは、まさしく皆さんの活動の賜物である。皆さんは、これからながく続く(たぶん)重要な輪をひとつ継がれたのだ。